



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	黄表紙『笑話於臍茶』の、醒めない「夢」：その典拠を中心として
Author(s)	坪田, 良江
Citation	国語国文研究, 104, 41-54
Issue Date	1996-11-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94837
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_104_41-54.pdf



黄表紙

『笑語於臍茶』の、醒めない「夢」

おかしはなしおへそのちゃ
——その典拠を中心として——

坪 田 良 江

安永九年刊、臍下辺人作・北尾政演画の黄表紙『笑語於臍茶』。從來、この作品をめぐることは、作者「臍下辺人」の人物比定の問題を中心に論じられることが多かった。しかし、本作には、なおも問題とすべき点が認められよう。それは、本作品がストーリー・構成等いくつかの面で、黄表紙の初期にあたる安永期の作品ということとを差し引いたとしても、あまりにも不自然である、という点だ。『笑語於臍茶』は何故、かくも不自然な作品となってしまったのか。この小稿の主眼は、その考察にある。

『笑語於臍茶』の作者の問題／「臍下辺人」京伝」説

その前にまず、従来主として論じられてきた、この一作のみにみえる「臍下辺人」なる作者が誰か、という問題に触れておこう。

「臍下辺人」が、同書の画工をつとめた山東京伝（北尾政演）の、若き日の別号であったという説が提示されて久しい。その指摘は、

近代以降では、早くは水谷不倒（注1）、宮武外骨（注2）あたりに始まるが、いずれも主に『釋史提要』（注3）備考の記述「……或人云、おかし咄の臍下逸人も京伝のことなり、其證は文政間に、京伝が旧記を抄集せし戯作問答の頭痛の図、おかし咄と同図なるを以て知るべしといへり」に依っているものと考えられる。後、小池藤五郎氏は、『笑語於臍茶』は、黄表紙形の断本であり、作者の「臍下辺人」は、京伝の変名とされてゐる。『はらのあづま』の下谷に住む臍と言ふ翁が夢を見る趣向で、拙劣ではあるが、初期の作品としては余儀なからう。……（注4）と、その拠り所こそ明らかにされないものの、やはり「臍下辺人」京伝」説に与された。一方、森銃三氏が「……京伝の初期の黄表紙として小池氏の推定したもの内、……臍下辺人といふ署名の『笑語於臍茶』も、果して京伝なりや否や、更に慎重なる検討を必要とするであらう。この兩種（同書と『開帳利益札遊合』——引用者注、以下同）共に京都帝国大学所蔵の旧久原文庫本の中にあることを知つてゐながら、まだ往いて見る機会に

恵まれないが、臆下辺人といふやうな賤しい作名、目張堂少通変人といふやうな事々しい作名を、果して京伝が用ひたかどうか。共に大いに疑はしとせねばならぬ。小池氏はこの二作をいかに見てゐるかといふに、……(前掲の小池氏の言の引用)、してみると、この作を京伝なりとするだけの自信は、小池氏にもないらしい。……(注5)と、同説を否定する立場をとられたため、氏の推論が適當であるか否かはともかく、作者・臆下辺人をめぐつては、相反する両説がとりあえず唱えられたわけである。これらの研究を踏まえた上で、棚橋正博氏は『神史提要』が「おかし咄と同図」という「氣替而戯作問答」(文化一四年刊、京伝作・豊国画)の挿画と『笑語於臆茶』のそれとを掲出・比較、「臆下辺人」京伝」説を支持された(注6)。なお、この問題に関して、水野稔氏はその著『山東京伝年譜稿』(ベリかん社、一九九一年)では「臆下辺人」京伝」説を「通説」として紹介しながらも「疑問」として判断を保留されている。しかし、同氏が編集代表をされる『山東京伝全集』第一巻(ベリかん社、一九九二年)には「確証はないものの京伝作の可能性が強い」ものとして『笑語於臆茶』が所収されており、音読みをした際の「醒齋」との音通(セイカヘンジン/セイサイ)という点を併せ述べられ、水野氏もまたかなり「通説」支持の側に寄られていると判断してよろう。

私も「臆下辺人」京伝」説に賛同するが、その際に、棚橋氏・水野氏らの指摘に加え、寛政期の京伝作品の中にはほかに、この『笑語於臆茶』から趣向や表現を転用したとおぼしきものが認められるという点を根拠としたい。明らかに『笑語於臆茶』を焼き直したこ

とがわかる作品は、『五体和合談』(寛政一一年刊)である。山本陽史氏は、『氣替而戯作問答』について、「……この作品の内容は、実は京伝の作品の記述や趣向をそのまま移し変えてつぎはぎしたものである」として、その材料となつた過去の作品一覧の中に『笑語於臆茶』を挙げられ、「……安永九年の『笑語於臆茶』は寛政十一年の焼き直し作『五体和合談』を経由しているゆえ使われたのである」と、両作の關係を示されている(注7)。山本氏は、さらに、臆下辺人を政演の仮号と考える根拠として、「京伝最晩年の合巻『氣替而戯作問答』(文化十四年刊)にこの作の構図を使った画があることによる。『氣替而戯作問答』は京伝が自身の旧作を多く取り入れた内容になつており、私の調べた限りでは京伝以外の他作者の作品を引いた例は見いだせなかつた。……ちなみに京伝は寛政十一年刊の黄表紙『五体和合談』でも本作の内容を焼き直している」とも述べられている(注8)。これら山本氏論文中には、『笑語於臆茶』と『五体和合談』とにおける酷似する箇所を具体的に掲げられてはいないため、ここでいくつかの例を参考までに示しておこう【笑】は『笑語於臆茶』本文、【五】は『五体和合談』本文である。

【笑】おりふし、りやうあしのしもにすまひするあしのくわといふものおもひけるハ、われ左右ほどかうををなすものハあらじ、りやうそくにてこそ万里のミちもゆきかよへ、手がらといへど、われくたゝでハ、いかでてのこもなさんや。そのうへ、よろづのふじやうハてこそもちあつかへ、われはいさゝかけがれたるものをもつことなきに、あさゆふゆミづをつかふにもわれ

くハあとになし、かミになることハさておき、あたまにハついにげんざんもしたることなし。……五たいハけんふをまとへとも、われくハやうやくかんきのときもふくろひとへをきるばかり。もつとも、ぞうり・せつたハあてがへども、ざしきへとをるときハ、つれゆくことなし。そのうへ、かしこまるの、つくばふのとて、かりにもしりにしきつけれ、いかにわれくしにもすめバとて、かくいやしめらるゝことぞや。このしかた、あまりむねんなれバ、せめてあたまをわづらハせて、うつふんをさんぜんと、左右だんかういつけつして、むほんをくわだてけるこそ、うたてかりけるしだいなり。それよりあしハ、ひざをよびてたんかうする。(三ウく五オ)

【五】こゝにまた、りやうあしの下にすみて、あしくひといふものあり。……それがし、つらく思ふに、われら左右ほど功をなすものなし。りやうそくにてこそばんりのミちもゆくなれ、よろづのふしやうも手にハもてども、あしにハいさゝかけがれたるものをもつことなし。しかるに、あさゆふゆミづをつかふにも、われくハあとになし、五たいハいろくよきいふくをちやくせども、われくハかんきのときもふくろひとへをあてがふのミ。せつた・げたも、ざしきへとをとるときハぬかネならず、そのうへ、かしこまるの、つくはふのとて、かりにもしりにしかるくししかた、あまりむねんなれバ、せめてあたまをわづらわせ、心をくるしめて、うつふんをはらさんと思ふが……やがてむかふづねをもよびにやり、ひざともだんかうして、あたまをわづらわすはかりことをたくミける。(八ウく九オ)

【笑】左右のしびりハ、こよいぞほんもうたつすべきときぞと、つめのぼりけれバ、あたまハつうのわづらいいでゝ、しだいにくるしくなりけれバ、さてハ下よりわれにあたをなすものありとおほへたり。いでくこれをふせんと、ちりおつとつてひたいにあて、なをもはちまきをげんちうにかためたり。(六ウく七オ)

【五】さるほどに、両のあしハしびれといふやまいをおくらせけれバ、しびれハこゝぞとつめ上るほどに、あたまハづづうといふわづらひいでゝ、大きにくるしミけり。……(頭の八文字皺はさてハ下よりあたまにあたをするものあり、とおほへたり。いでくこれをふせがんと、ちりをとりてひたいにあて、はちまきをげんちうにかためけり。(一〇オく一〇ウ)

両作には、枚挙に暇がないほど、このように似通つた表現が多出する。妬みによる足の謀反、痺り(れ)による頭への攻撃、手の援軍、合戦、足の敗北、臍による和睦、といったストーリー(『笑語於臍茶』の上中巻部分が、『五体和合談』の一部、八ウく一五オ部分に対応)は無論、同様に画についても、相对应する場面で類似のものがある(図1く4)。図1・2はいずれも擬人化された「痺り(れ)」が「京へのぼる」場面、図3・4は、「痺り(れ)」に悩まされる場面であるが、図3・4については少々補足が必要であろうか。両作のこの場面に描かれた「痺り(れ)」は、その擬人化のパターンが違ふ。しかし、図4の三人(匹?)のポーズは、図3の画面右上に位置する三人(匹)のそれに相当するだろう。また、「痺り(れ)」に悩ま



(図2) 『五体合談』(9ウ)



(図1) 『笑語於臍茶』(5ウ)



(図3) 『笑語於臍茶』(6ウ・7オ)

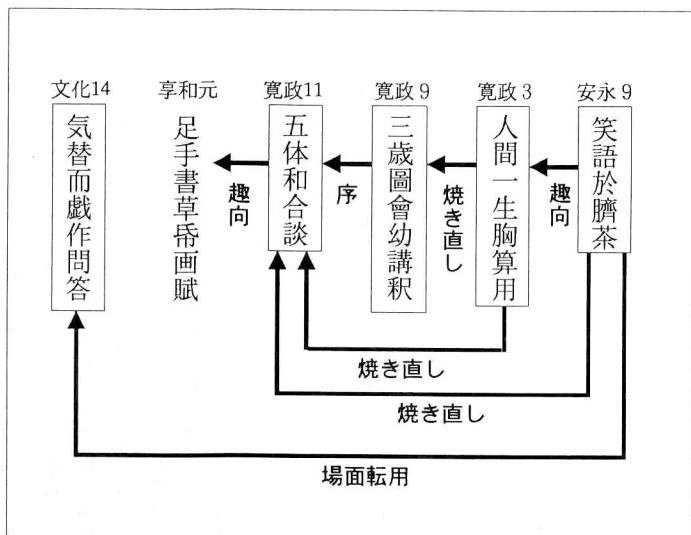
れる男（但し、図4の男は擬人化された「頭」である）は、その顔だちや画面に比しての大きさは異なるが、腕捲りをしたポーズや表情は、ほぼ同じに描かれている。

しかし、『五体和合談』だけではない。実は、寛政期における京伝は、どうやら、この身体の趣向をししば使用していたようなのだ。もう少し詳しくいうと、この『五体和合談』自体も『心学早染艸』の続編『人間一生胸算用』（寛政三年刊）の焼き直しでもあり、且つ同九年刊『三歳圖會幼稚講釈』の一場面を借用したものである。つまり、『笑語於臍茶』は、寛政期には『人間一生胸算用』、『三才圖會幼稚講釈』そして『五体和合談』、文化期の合巻『氣替而戲作問答』と、繰り返し京伝作品に焼き直され、それらは一連の系統図をかた



(図4) 『五体和合談』(10才)

ち作っているかにさえ見えるのである(図5)。この、いわば『笑語於臍茶』の系譜とでも呼ぶべきものと、それを形成する作品群については、いづれ機会を改めて述べるつもりであるが、表現を先行作からそのまま用いている部分もかなり認められる。画についても同様である。これらの一連のものを概観するに、当時如何に著作権と



(図5) 「五体」を趣向とする作品群関係図(圀枠は京伝作)

いう考え方が確立していなかったとはいえ、京伝がこれほどまでに何度も、『笑語於臍茶』の趣向を、それも同様の表現すら用いて繰り返しているという事実は、この作が京伝自らの手になるという可能性を示唆するものではなからうか。

「臍下辺人」が京伝であるならば、次にまた新たな疑問が生ずることであろう。彼は何故、同年刊の他作（『娘敵打故郷錦』）においては、初めて戯作者としての「京伝」の名を用いているにも関わらず、この作では別号を用いなければならなかったのか、という疑問だ。この作品が「作者京伝」のデビューにふさわしくないかと判断されたのだとするならば、何が問題とされたのだろう。その答えは、たぶん、本作の「不自然さ」と無関係ではないだろう。

『笑語於臍茶』の不自然さ

では、本作の不自然さとは、具体的には、どこにあるのだろうか。ここで一度『笑語於臍茶』のストーリーをみてみよう。

——「ある人」が、臍の辺りがこそぶくかと思ひながら、夢を見る。画では、彼の腹の辺りから「夢のフキダシ」状のモヤが出、その中に擬人化された臍が座っている。さて、臍より下に住まう両足・土踏まず・踝は、臍より上の両手・頭・小指らが日頃大事にされることを妬み、「臍の西国」を狙って痺りを上せて頭を悩ます。両者の合戦が始まり、足の仲間は敗北する。そのいさかきを聞きつけた臍の翁が足を説得、両者は和睦をする。五体は和合し、臍の翁の笑い話に喩えた教訓（下駄と草履の話、扇の要の話、朝顔と大角豆

と栗の話）に、一同聴き入った。——

小池藤五郎氏がこれを「黄表紙型の断本」とされ、「拙劣」と評されたように、まとまりがなく完結していない、という印象が確かに強い。その印象は、特に巻頭部分と巻末とに呼応がない、ということに起因するものだろう。「ある人」が夢を見る、しかし、その夢が醒めるという部分がない。臍の教訓の場面で終わってしまうのである。これは非常に大きな問題ではないのか。黄表紙の夢は、その濫觴である『金々先生栄花夢』以来、否、それ以前の初期草双紙の時代から、夢を見始める場面が始まれば必ず、夢が醒める場面でしめるものではなかったか。この場合の逆、つまり、夢から目醒める場面のみ（今までの話は実は登場人物の夢の中の出来事であった、とする夢オチ）というものはある。しかし、夢を見始めた以上は覚醒で終わる、というのが通常のかたちだ。この冒頭の夢見の場面を、本文とは切り離れた、単なる序と捉えるべきなのだろうか。

冒頭に登場する、夢を見る「ある人」は、その顔だち、着物の柄から、先に掲げた図3の「痺り」に悩まされる男と同一人物であると判断されよう。一方、本作の作者が京伝である可能性が高いことは先に述べた。作者が画師政演その人であるならば、画師が作者の意図を汲み取れなかったために、本来無関係であったはずの「ある人」と図3の男とを同じ人物に描いてしまった、という推測は成り立たない。したがって、この作の内容は確かに、「ある人」が見た、自分の身体の夢の話、という設定なのである。とはいえ、あくまでも語り手は作者であり、「ある人」自身が語っている形式をとっているわけではない。では、この「ある人」の存在に、どれほどの意味

があるのか。夢の内容という設定にすることに、どんな積極的な意味があるというのだろう。読者は読後もその夢の裡に囚われたままの状態で放置されてしまう。醒めない夢を見るくらいなら寧ろ、「これは夢の中のできごと」という設定自体を外してしまつた方がわかりやすいではないか。夢見の場面が序であるというのなら、序にはいくらでも他に書きようがあるし、乱暴なことをいえば、序などなくともよい。

不自然な印象を与える原因は、本作の構成にもある。上・中巻で足の謀反という主要な事件が解決してしまい、下巻では主に教訓としての寓話が語られるというのは、いかにもバランスが悪すぎるのではないか。まるで、何か先行の作があつて、それを抜粋のような形でまとめたかのような感すらある。

何故、彼の夢は醒めないのだろうか。『笑語於臍茶』にみられる身体ものの趣向を用いる先行作のようなものを見つけたなら、そこから手がかりが得られないだろうか。人体の各部（五体）を擬人化し、また全体を一つの世界（国・家）ととらえるという発想を寓話的に用いたのは、黄表紙の、この作に始まるものであつたのか（注9）。遡ると、古くは仮名草子の『伊曾保物語』巻中第卅六に、頭・両手足等の各部が腹を妬んで反抗するという話がみられる。あるいは、後に曲亭馬琴が五体の趣向を用いた黄表紙『足手書草帛画賦』（享和元年刊）の自序に「……予、一日旧箱を開て風俗文選を読む。汶村が手足の弁に至て暗に予が論に合す。因て執て三本の冊子を作り、書肆が積日の責を塞といふ。」と述べるように、俳文『風俗文選』にある松井汶村の「手足ノ弁」（注10）あたりに求められるものか。さ

らには、談義本の類にもそれらしきものをいくつか探し出すことはできる（注11）。しかし、これらはいずれにせよ、その影響の可能性は指摘できるものの、いま決定的にこれと断言できるほどのものではない。いまの段階ではとりあえず保留とし、先に進むしかない。

この作品には、気になることがさらにある。教訓色の強さである。教訓色、殊に、「臍」の発話を中心に、「いろ／＼せけんをみるに、すべておのれがぶんをわすれ、かみをうらやむものぞおゝかりき。

……わきまへもなき下ハ、上をうらやむもことわりにこそと……」（二ウ・三オ）、「上下ハすなハち天也。天は下たるちをめだ（ママ。『で』の誤刻）、ち、上なる天にしたがい、すこしもそむくものでなし」（九ウ）、「とかくしやうじきちうしんをせん」とセバ……」（九ウ）、「今よりノつゝしミ大じなれハ……」（二二ウ）、「されハたれもおのれがわざをもつはらとし、たをとがむまじきことなり」（二五ウ）等といった表現が見られるということ、「五体和合」（二二オ）という語句の使用、そして、会話（説教）のうちに己れの身の程を知るという意を示した「歌」が添えられていること、これらの点に注意しなければならぬ。「分」を弁え、自分の「業」に専心することを奨励し、それによつて「和合」すると説く——これは石門心学の謂ではないか。「臍」はまさしく心学者であり、教訓はまさしく道話、歌はまさしく道歌である。『笑語於臍茶』は心学ものと称してもおかしくはない。何故、この時期の江戸の黄表紙に、石門心学的教訓が色濃く現われているのだろうか。

江戸の石門心学普及に貢献した中沢道二の江戸下向は、安永八年三月のことであるといわれている。この黄表紙『笑語於臍茶』の刊

行が安永九年であるから、安永八年といえはこの作の執筆期にあたる。つまり、この作品が創られている頃、江戸においてはまだ石門心学はほとんど普及していなかったはずなのだ。また、関東における石門心学の拠点となった参前舎の創立は安永九年のことであるから、本作の執筆期には、道二はほとんど活動していなかったと思われる。ちなみに、江戸での石門心学ブームは、天明末頃から寛政期にかけてに始まり、黄表紙にそれが強く反映されるのは、寛政期に入ってからのことである。何故、安永八年の段階で、心学もの黄表紙が作られ得たのだろうか。

「醒めない夢」の理由

以上、『笑語於臍茶』をみてきたが、これらの巻頭・巻末の呼応の欠如とバランスの悪さ、時期外れの石門心学的要素といった問題を不自然に感ずる直感が正しいならば、この作品に非常に近い先行のものが、それも石門心学関係の書の中に求められるのではないか、という推測が成り立つ。

そこで、この時期にすでに刊行されていると考えられる石門心学関係の出版物の中に、同様の内容をもつものを搜してみると、果たして、明和二年・安永三年の序をもつ『(五体／和合) 臍隠居』(岡田驚光著)なる心学書が、画文ともに『笑語於臍茶』と全く同じ部分を含むことが判明したのである。『臍隠居』は、国書総目録によれば、大阪府立図書館蔵本が天保三年版である以外、他諸本はいずれも刊年不明であるという。尚、著者・岡田驚光なる人物の詳細に

関しては不明であり、また、今回の調査にあたって管見に及んだ諸本は、国立国会図書館蔵本、都立中央図書館特別買上文庫蔵本、長野県上田市立図書館花月文庫蔵本、大喜多勘学氏蔵本、宮澤俊雅氏蔵本である(注12)。

本書は些か入り組んだ体裁となっているため、まずその構成を左に記す。

○扉(書肆名「循古堂」がみえる。花月本にはない。)

①安永三年「序」(一〇ウ・八ウ)

②明和二年「序」(九ウ・九ウ)

③本文(二〇ウ・二二ウ)

④跋(二二ウ)

⑤『論語』・『孟子』句解(二三ウ)

⑥「大意」(二三ウ)

⑦「跋」(二四ウ・二六ウ)

○奥付

○循古堂蔵版目録(花月本のみ。二丁分)

なお、挿画は、

a) 五ウ・六ウ

b) 一二ウ・一三ウ

c) 一四ウ・一五ウ(二四ウ・一五ウにも一部かかる)

d) 一七ウ・一八ウ

e) 二一ウ・二二ウ(二〇ウ・二二ウにも一部かかる)

の五図である。また、九ウ、二二ウ、それぞれに巻物のはじめとお

わりのデザインが施されている。画師不明。

①では、以下のような内容が語られる。――秋の半ばに友人同士が集まり座談をする。その中の一人が、思い出したことを語り始める。「頃日、不思議な夢を見た。夢の中で『臍翁』と名乗る人物に五体合に喩えた五倫和合の教訓をされ、『臍歌』（道歌）を示された。それを忘れまいと吟ずるうちに、自分の臍の周りがこぼれなくなり、今までの出来事が夢であったと知ったのだ」と。すると、いま一人の人物が「或人」からもらったという『五体和合臍隱居』なる書を取り出して見せた。一同、「今日はいかなる臍日ぞ」と笑ったが、「予」は、「この書は『おかしき論』なので、五倫和合に味い人々のため、挿画を入れて出版したい」と提案する。友人の同意も得、この座の話をそのままに「序」とし、その場で書いた。――そして、次にすぐ②③の、巻物デザインで括られた「序」・本文が置かれる。ということは、①の「序」に従うならば、①の中に語られる「或人」からもらった「書」とは、まだ出版されていない明和二年に作られた、②③の巻物の内容を指している。では、この「予」なる人物は誰か。③冒頭に「伏陽 岡田驚光著」とあるので、やはり素直に考えて「予」は驚光以外の人物である。また、④は、

暇日、何となく此たはむれごとをつづりて、親しき友に見せ侍
べりしに、京なる栗山の主に傳はり、其後は年月を経て忘れしに、
今年末の秋、思はずも或人これを得て桜木にちりはめんとせしな
る求めに逢ひ、いなむべくもあらず。望にまかせてかくなり。

という跋文になっている。これは内容上、驚光その人が出版にあたって新たに寄せた一言であると思われる。「暇日」は「明和二年」、「京なる栗山の主」がこの書を持っていた人物（「予」の友人の一人）、④の「或人」が①の「予」あるいは版元、ということになるうか。尚、⑦末尾に「堵菴」とあり、①末尾に「朝倉の環堵」とあることから（注13）、①の「予」は手嶋堵庵と推定もできる。しかし、結局、現在のところこれ以上はこの書の詳細はわからない。

では、次に、この書の本体とも呼ぶべき③（二〇オ―二二オ）をみてみよう。臍隱居の様子から始まり、臍より上の者を妬みでの足の謀反、痺りを上らせて頭への攻撃、両者の合戦、足の敗北、臍の翁の説得による和睦、臍の翁の教訓（下駄と草履の話、扇の要の話、朝顔と大角豆と栗の話）で終わる、と、その内容はすべて、『笑語於臍茶』の地の文にそっくり対応している。表現も、細かい部分と発話部分の書き入れを除き、ほぼ同じだ。相对应する箇所の例をいくつか具体的に掲げ、両者の本文が如何に酷似しているかを示そう（「臍」は『臍隱居』本文、【笑】は『笑語於臍茶』本文である）。

【臍】聞しにたがハズ翌夕かた、彼坐敷へ参られしに、例の如く尻に敷居てかれこれ挨拶、ほどなふ馳走のもてなしあり。左右の足、影而爰ぞとうなづき合、しびりといふ煩を發さんとせしが、こゝに一の難儀あり。五体を守る臍隱居たやすくハ通すまじ、いかガハせんとも亡然たりしが、氣をとり直し、思ひ立たる大望なれば、なじかハ此まゝやむべきと、頻にしびりをぞ發らせける。（一一ウ―一二オ）

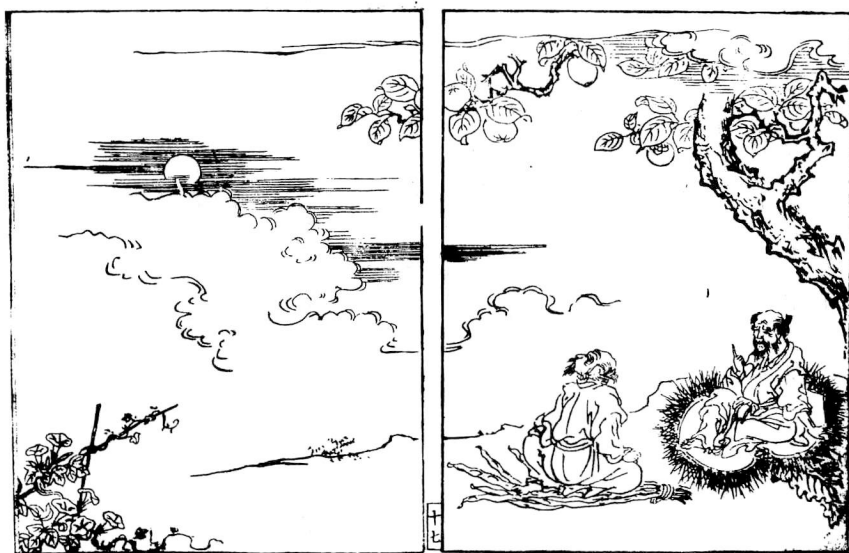
【笑】きゝしにたかはずよくゆふかた、かのさしきへまいられしに、
 れいのごとくしりにしきゐてかれこれあいさつ、ほとなふちそう
 のもてなしあり。左右のあし、やがてこゝぞとうなづきあひ、し
 びりといふわつらひをおこさんとせしが、こゝにひとつのなんぎ
 あり。五たいをまもるへそおやちたやすくハとふすまじ、いかゞ
 ハせんとぼうぜんたりしが、きをとりのなをし、おもひたつたる大
 もう、なじかハ此まゝやむべきと、しきりにしびりをぞおこらせ
 ける。(六才)

【臍】しびりハ頂より急に責むべしと、大音上てのゝしれバ、頭ハひ
 るまず下知をなし、両の手打手を蒙りて、まつしくらに駈下り、
 方便の指を以てさんぐにもミ立、ふじより三里の邊まで蓬の矢
 を艾とし、火をもつてきうぐに責たつれハ、今ハしびりもたま
 りかね、忽に引下る。然れども、大望を企此俟引退く事の口惜さ、
 折を窺此うつふんをはらさんものをと足すりし、無念の体にて立
 たりけり。(二三ウ一四才)

【笑】かくて、しびりハいたゝきよりきやうにせむべしと、大をんあ
 げてのゝしれバ、かしらハひるまずげぢをなし、りやうの手、う
 つてをこむりて、まつしくらにはせくだり、はうべんの指をも
 つてさんぐにもミたて、ふじより三りのへんまで、よもぎのや
 をもぐさとし、ひをもつてきうぐにせめたつれバ、いまハしび
 りもたまりかね、たちまちに引さがる。しかれども、大もうをく
 ハだてゝこのまゝひきしりそくことのくちおしさ、をりをうかゞ
 ひこのうつふんをはらさんものとあしづりし、むねんのていに



(図6) 『臍隠居』挿図b (12ウ・13才)



(図7) 『臍隠居』挿図d (17ウ・18オ)



(図8) 『笑語於臍茶』(14ウ・15オ)

てたちさりける。(七ウ〜八オ)

【臍】^{へそ}ハ其時思ふやう、^{しも}下たる者、^{いまよりつし}自今の慎、^{だいじ}大事なれば、^{きこつた}聞傳へたる事を語るべし。むかしより、^{ふりやうけん}不丁簡を思ひたち本意と^{おぼ}とげしものハなし。下駄といふものおもひけるハ、^{ぎやうり}草履より我等ハ^{うしろ}背も高く、あしをぬらさぬ功もあれど、^{ぎやうり}草履とりハあれども下駄取なし。此義を無念と腹立て、^{やは}夜破をおこしけれども、^{げた}下駄ハ^{れいぎ}礼儀にならされハ、^{あまつさへ}ついに丸まけ、^{さうり}刺 つらに^{ぎやうり}草履を^{うちつけ}打付られ、^{まつだい}末代に恥辱を残し、今も其かたち世にしるゝさうり^{げた}下駄とていはれる。

(一ハウ〜一九オ)

【笑】へそハそのときおもふやう、しもたるもの、今よりのつゝしミ大じなれハ、きゝつたへたることをかたるべし。むかしより、ふりやうけんをおもひたちたるもの、ほんゐをとげしものぞなき。げたといふものおもひけるハ、さうりよりわれらハせもたかく、あしをぬらさぬこうもあれど、さうりとりハあれどもげたとりハなし。此ぎをむねんとはらたちて、^{やば}夜破をおこしけれども、^{げた}ハれいぎにならざるゆへ、^{あまつさへ}ついにまるまけ、^{さうり}あまつさへつらにさうりをうちつけられ、^{まつだい}まつだいにちじよくをのこし、^{いまも}いまもそのかたちよにのこり、さうりげたとぞいわれける。(二二ウ〜一三オ)

これはすでに焼き直し、というような性質のものではない。若干の異同はあるがほぼ丸写し、といつてもよいだろう。挿画にも酷似するものがあるので掲げておく。『臍隠居』の b (図6) に『笑語於臍茶』の六ウ・七オ (図3) が、d (図7) に一四ウ・一五オ (図

8) が、それぞれ対応していることは明らかだ。

ここで、呼応しない、覚醒しない「夢」の設定の問題に戻ろう。『笑語於臍茶』の一オに対応する部分を『臍隠居』の中に探すことによって、この黄表紙の不徹底さの理由を推測できるかもしれない。実際にみてみると、『臍隠居』の安永三年序(①)の中、ある人物が長々と自分の見た夢の話を語る場面の最後に、「我臍の廻りこそばくなりて、夢ハ忽覚たり」とある。この部分こそが、『笑語於臍茶』の問題の冒頭「わがへそのあたりこそばゆくなるとおもひ、おかしきことをゆめにミる」に対応するものではないか。すると、以下のような推測が可能であろう。すなわち、『臍隠居』の設定中の、一人物が岡田驚光作の「書」(巻物)を取り出すきっかけとなった、「夢」の話の目覚めの場面を、そのまま何らかの都合(おそらくは物理的な理由つまり丁数の問題か、単なる勘違い)によって、『笑語於臍茶』に「夢」を見始める冒頭として採り込んでしまった。後は最終丁まで、ほぼ「書」の丸写しの状態である。『臍隠居』の①内では呼応していた「夢」の設定は、そうすることによって、後作の黄表紙では呼応できなくなってしまうた、とは考えられないだろうか。

ところで、いま黄表紙の方が「後作」と述べたが、『臍隠居』が『笑語於臍茶』の刊年に先立つ序をもつからといって、実際の刊年が不明である以上、それに先立つ出版であるとは限らない。さらに、京伝作黄表紙『心学早染艸』(寛政二年刊。江戸、中本)が丸写しにされ、上方で絵解き心学書風の書物『人間境外心善悪』(半紙本となつた例はあるものの、逆の例、すなわち、上方で出版半紙本の心学書が丸写しにされ、江戸で中本の黄表紙として売り出されたという例

の報告はきかない。しかしながら、当時の出版書肆の開版販売認可に関する、公的記録簿たる『割印帳』の「安永四年六月廿七日」条に、

臍隠居 全巻冊

墨付廿七丁

明和二年酉秋

堵菴著

板元 海老屋弥兵衛

卖出 小林新兵衛

という記載が確認される（注14）。これは、『笑語於臍茶』の執筆期には既に、それも江戸市中にあつて『臍隠居』が求められたらしいことを意味する。ちなみに、ここで著者名が「堵菴」となっているのは、奥付のすぐ近く、最終丁（二六ウ）末尾に、著名な心学者であり本書に跋を寄せた人物である「堵菴」の名がみえるためと理解できる。

ともあれ、以上のことから、人間の「五体」に注目し、それを国（家）として描き、あるいは擬人化するといった趣向を採用した黄表紙の、記念すべきスタートたる『笑語於臍茶』は、後に大作家となる京伝が、他書をほぼ丸写しにして画を増やし黄表紙の体裁に作った、習作のごときものであるといえよう。してみると、この年初めて戯作者としての「京伝」の名を他作で用いていながら、本作で「臍下辺人」なる別号を用いたのも、この辺りの事情によると考えられ

るのではなからうか。なお、『笑語於臍茶』の焼き直しである『五体和合談』の書名が、さらに遡る『臍隠居』の角書「五體／和合」に由来していることも蛇足ながら付け加えよう。

『笑語於臍茶』の「ある人」は覚醒しない。黄表紙というコンパクトなフィールドに、無理矢理押し込まれたとき、彼の「夢」は醒めなくなつた。そして、別号・内容・構成、本作のすべての不自然さの理由は、たぶん、この強引さに由来する。彼の見る「夢」は、しかし、寛政期には黄表紙で繰り返されるようになる。それは、本来この趣向が、否、この作品自体が石門心学の世界に起源をもつていたことに起因するのであるが、私には、まるで、五体の趣向が、眠り続ける彼の「夢」のうちで、時機を窺っていたかのように見える。

注

（注1）水谷不倒・坪内逍遙共編著『列伝体小説史』（春陽堂、一八九七年）『水谷不倒著作集』第三卷【中央公論社、一九七四年】所収。

（注2）宮武外骨編『山東京伝』（吉川弘文館、一九一六年）『宮武外骨全集』六【河出書房新社、一九八八年】所収。

（注3）広瀬朝光氏「翻刻『稗史提要』並びに研究」（同氏「戯作文芸論——研究と資料」【笠間書院、一九八二年】所収）。

（注4）小池藤五郎氏『山東京傳の研究』（岩波書店、一九三五年）。

(注5) 森統三氏「山東京伝とその作品」(『森統三著作集』一【中央公論社、一九八八年】所収)。

(注6) 棚橋正博氏「黄表紙総覧」上編(青裳堂書店日本書誌学大系48、一九八六年)。

(注7) 山本陽史氏「戯作者の晩年——山東京伝の戯作回帰——」

『解釈』一九八九年五月号所収。

(注8) 山本陽史氏「山東京伝の習作期」(森川昭氏編『近世文学論輯』【和泉書院、一九九三年】所収)。

(注9) 人間の身体を一つの空間あるいは世界として見立てる、もしくは各パーツを擬人化するという趣向の黄表紙には、このような「外部から見える部分」(手・足・頭等)に注目するもの(仮りに「五体タイプ」の身体もの)と称する)のほか、『十四傾城腹之内』(寛政五年刊、芝全交作)に代表される「外部から見えない部分(内臓)に注目するもの(同様に「五臓タイプ」の身体もの」とする)があるが、両者はそれぞれ別の系統(影響関係)を形成するものであるため、「五体タイプ」の系統をみる本稿においては「五臓タイプ」のものについては触れないこととする。別の機会に譲りたい。

(注10) 宝永三年刊『本朝文選』(『風俗文選』)「手足ノ弁に、……こゝに一身の中。足をいやしとし。手を貴しと定め置たるは。いづれか賤とし。いづれかたふとしとせむや。いやしとて。終に斬り捨たる人もきかざれば。持にこそ定メ置たけれ。それ足は行歩を産として。外の用をしらず。……手は一身の奴にして。定めたる産なし。頭の虱を捫り。跟のあかぎれを撫る。至らざる所なく。

又なさずといふ事なし。是いやしき事の第一なるべし。……」
とある。(大磯義雄氏・大内初夫氏校注『古典俳文学大系 蕉門俳論俳文集』【集英社、一九七〇年】所収)。

(注11) 自堕落先生『勞四狂』(延享二年)。また、擬人化ではないものの、無用無為にして安楽な境涯にある「臍」を、羨むべきものとするものに、自堕落先生『風俗文集』(延享二年)、静観房好阿『當世下手談義』(宝暦二年)等が掲げられる。

(注12) 但し、以下のもののうち、花月本・大喜多本は国文学研究資料館マイクロ資料によった。

(注13) 堵庵は隠居後、朝倉町に五楽舎という書齋を設ける。五楽舎は、安永二年に修正舎が設けられるまで、その講客場ともなっていた。

(注14) 樋口秀雄氏・朝倉治彦氏編『未刊国文資料別巻 享保以後江戸出版書目』(未刊国文資料刊行会、一九六二年。底本・東京国立博物館蔵本)。

※掲載図版は、(図1)～(図4)、(図8)は東京都立中央図書館加賀文庫蔵本、(図6)～(図7)は同特別買上文庫蔵本による。ご協力を賜りました東京都立中央図書館に厚くお礼申し上げます。

(つばた よしえ・東洋鑄造貨幣研究所研究員)